

冷日微烟渭水愁。華清宮樹不勝秋。霓裳一曲
千門鎖。白盡梨園弟子頭。

但此の詠史懷古の作も、大抵は様に依つて胡
蘆を畫くを免れず。元明清の諸家の集、此の種
の作を見ることが殆ど枚舉に遑あらざれど、復た
特に出色のもの無きを如何んせん。却て王建に
又た華清宮と題する絶句あり、云ふ

酒幔高樓一百家。宮前楊柳寺前花。內園分
得溫湯水。二月中旬已進瓜。

と。齋藤拙堂は此の詩を絶句類選に收めて

「天民老人嘗爲予云。嘗坐上州伊香溫泉。見
瓜熟詢之。土人謂予引溫泉灌漑。知王建
詩不妄。」と云へるが、以て彼我溫泉地の風俗

の相似たるあるを證すべく、普通の詠史懷古の
凡作を讀むよりは興味萬倍せり。

顧ふに驪山の溫泉に關する文學、大抵上に述
ぶる所に盡く。若し更に之を詞曲小説の類に求
めば、或は猶ほ意外の收獲あるやを保し難きも
予は僅に長生殿傳奇の外には知る所なし。即ち
長生殿傳奇に寢浴と題する一齣あり、玄宗と楊
貴妃とが相擁して驪山の溫泉に入浴せし所を、
侍側の宮女が竊かに隙見する場面なり。其の入
神の妙筆は一讀能く人をして恍惚魂銷せしむ。
蓋し驪山の溫泉に關する文學として、最も濃艶
の情趣に富めるものとす。

臨潼華清宮溫泉作

六首

鈴木豹軒

既有棲鴉噪白楊。

驪山秋色晚蒼茫。

降車僅罷臨潼縣。

先訪玉環供奉湯。

山下亭園秋柳黃。

雙池南面室中央。

玉甃金甃零落盡。

道是唐朝貴妃湯。

碧嶂嵯峨渭水濱。

千門想像翠華春。

于今山下溫泉滑。

不洗凝脂洗旅塵。

東向河南第一程。

微風纖月入華清。

牆邊敗葉蕭々響。

猶似當時私語聲。

殿址荒涼渭水東。
清后行宮碧蘚荒。

分明樹色接新豐。
會經宮監倚新妝。

開天遺事倩誰語。
只今田老司門鑰。

不遇津陽門北翁。
手導吾曹浴御湯。

別府溫泉

石川成章

溫泉通が口を開けば別府は九州の箱根だといふが、其所在の地理的關係からいへば、九州の箱根は寧ろ島原の雲仙溫泉か又は阿蘇か霧島の溫泉を以て之に當つべきであつて、別府は恰かも熱海に似た處である、併し熱海は境域小隘で

到底別府の景勝雄大に及ばない、阪神地方から下之關まで急行列車を利用すれば約十八時間で達する事が出来、汽船を利用すれば、行く行く瀬戸内海の勝景を賞觀しつゝ一晝夜で別府に行く事が出来る。

箱根、熱海觀光の外客や京濱を初め關東地方の客が多く、別府は阪神地方より四國、中國、

九州の客が多い、近年水陸の便を利用して滿、鮮地方よりの浴客が年々著しく増加するのみならず設備の改善に伴ふて外人の來浴者も追々増加する狀況である。

昨年の大震災前から我邦の商業經濟力の中心は、京濱地方から阪神地方に移りつゝあつたが震災後は、愈々阪神地方の經濟力が優越の地歩を占めた、従て別府溫泉の繁盛は箱根熱海を凌駕する事と爲つた。

貝原益軒翁の豐國紀行によれば、今より二百三十年前なる元祿七年、貝原翁の豊後に遊んだ頃は、別府の民家は僅に百軒計りであつた様子